

【イソップ物語】 前の四十四頁に出てゐる。

六六 フランクリンの日常制度

- 一、節制 だるくなるまで食ふな、正氣を失ふまで飲むな。
- 二、沈黙 他人もしくは自分の利益のある事の外は話すな。むだばなしをさげよ。
- 三、秩序 品物はすべて、そのおくべき所に置き、しごとをするには、一々その順序を立てよ。
- 四、決断 しないでならぬことは、これをするやうに決心し、決心したことは、まらがひなくしとげよ。
- 五、經濟 自分もしくは他人のためになる事をする外は、決してよけいな金をつかふな、どんな物でも、むだに棄てるな。

- 六、勤勉 時間をむだにつかふな、何でも必要なことに、たえず精だし、無益なしごとは、一切すて、しまへ。
- 七、忠信 害になる偽をするな、無邪氣に、正しく考へ、話す時にも、その通りに話せ。
- 八、正義 害になることをしてはならぬ。また自分のしなくてはならぬ恩義を略して、人をわるくしてはならぬ。
- 九、耐忍 極端はさげよ。いたましい毀害も、こらへられると思ふだめはこらへよ。
- 十、清潔 身體、衣服、或は住居に、不潔なことがあつてはならぬ。
- 十一、沈静 つまらぬ事や、ごくありふれた出來事、またさけることのできる事からに、かき亂されるな。
- 十二、貞操

十三、謙卑 神および聖人に則を求めよ。

【フランクリン】 前の七十二頁に出てゐる。

六七 日常制度の修養

自分は、どうか誤らない生涯を送りたいものだと思つて、若い頃から、完全な徳性を修めようと決心してゐた。しかし心は、とかく亂れやすいもので、躬に行ふことは、なかなかむづかしいといふ事を發見し、これは悉く、在來のわるいくせをうち破つて、新に善美な習慣を養はなくては、とてもいかぬと考へた。そこで自分は十三箇條の徳目を選定して、その習慣を養ふことに盡力した。

しかしこれらの諸徳を、すべて一時に養はうとしても、到底できるものでないから、一から二、二から三と、だんだんに進んでゆくやうに

した。

たとへば、第一の節制で、精神を快活にすることができれば、第二の沈黙を修めるのは、決してむづかしくない。また沈黙とその次の秩序とは、われわれに企業と勉強との時間を與へるもので、これにその次の決斷の徳が、習慣となつてあらはれれば、なほ更その前へ進むのは樂になる。その他、經濟と勤勉とは、負債の苦からわれわれを免れさせた上に、富裕と獨立とを得させ、かねて忠信と正義とを行ふ上の基礎となるやうなものである。

自分はこの修徳法を實行するに當つて、日々検査することを怠らなかつた。まづ一冊の小さな帳簿を作つて、一枚ごとに縦横に線を引き、上に七曜を記し、右の側に十三箇條の徳目を列記しておいて、毎日々々自分の言行をしらべて、もし過失のあつた時は、その當るところの徳目

の下に、黒い點をつけることにした。ことにある一週間を通じて修養しようといふ、特別の徳目を立て、厳密にこれを検査した。ちようどの庭の雑草を薙り取るのに、まづその一隅から手を著けはじめて、漸次にそのすべてを薙りつくしてしまふのと、同じ手段を取つたのである。自分はこの小さな帳簿を作つた時、その上に二個の金言を書きつけたその一つは、

「智慧は、右手に長壽を提げ、左手に幸福を携へる。」
といふので、その一つは、

「その道に従ふものは、歡樂を得、その路に由るものは、幸福を得。」
といふのである。

さてこの方法で進むのにつけて、一番困つたのは、秩序の徳目であつた。これは職工のやうに、時間に規律のあるものなら、さほどむづかし

くもなかつたらうが、私のやうにいそがしいものには、不意に、内外から用が出てきて、どうしても秩序を亂さなければならぬ場合が多かつた。これはどうしてもいかん。諸徳全備などいふことは、とてもできないものでない。聖人にも過失はある。過失がないやうでは、きつと世間の人に妬まれるなど、一時はいろいろにげことばを設けて、多年の志をやめようともした。しかしそれは、今となつて見れば、われながら愚の至りであつた。

自分は今年ちようど七十九であるが、どうかかかつか、秩序の習慣をも修め得るやうになつた。この爲に自分の得た益は、なかなかはかりきれないほどである。どうか自分の子孫たるものは、自分のやうに心がけて、自分のやうに、天の祐助を享けてもらひたいものだ。(フランクリンの自傳による)

六八三つの友

ある人が三人の友だちをもつてゐた。その二人はごく親しい仲であつたが、一人はあまり親しい仲ではなく、ふだんゆきまきすることも稀であつた。

その人、ある時、人に訴へられて、身におぼえのない罪名を負ひ、法庭に引き出された。彼はそこで、友だちに向つて、どうか法庭に出て、自分の爲に、自分の無實の罪であることを證言してくれないかとたのんだ。

第一の友だと思つてゐた友は、

「私は今、手ばなしにくい急用があつて、折角ながら君のたのみに應じることができない。」

といつて、すげなくその請を斥けた。

第二の友は、彼を法庭の門まで送つて、さて、

「これから中へはひるのは、どうもおそろしくてできない。」といつて、歸つてしまつた。

あまり親しくなかつた、第三の友は、この時、つゝ彼のあとについて来て、みづから進んで法庭に入り、熱心に彼が無實の罪であることを證言して、到頭彼を免訴にしてくれたのであつた。

人間は誰でも、この世において、三人の友だちをもつてゐる。さてもこの三人の友だちは、われわれのいざ死ぬといふ、その時に、どんな友情をわれわれにつくしてくれるであらうか。

一番の友だちと思つてゐた「金」は、まづ第一にわれわれをうつちやつて、逃げてゆくであらう。第二の友であつた、われわれの親戚朋友は

名譽は徳に
伴ふと恰
もその影の
如し(シセ
ロ)

われわれを墓場まで送つてくれる。しかし彼等は、そこにわれわれを棄て、いつてしまふであらう。

第三の友は、われわれのふだん疎んじてゐた『われらの事業』といふものである、彼はこの時、ひとりその身をぬき出して、われわれを神さまのさばきの庭に導き、かくてわれわれの名を千萬年に傳へ、歴史の上にあらはさうと、つとめてくれるのだ。

あゝわれわれは平生、この第三の友をそまつにしてよからうや。

六九 早起の益

毎朝六時に起きるものは、八時に起きるものにくらべると、四十年間に二萬九千餘時間を得するわけになる。すなはち三年と百二十六日六時間だけまうけるわけになるのだ。もしこれを一日八時間だけとして割り

晝眠るもの
は夜飢うべ
し(フレッ
ス)
鶏鳴に起き
ざれば、日
暮に悔あり
(楠公家訓)

あてれば、ちようど十年になる。

苟くも道に志して、ある事業を成し遂げようと思ふものは、この時間のまうけを忘れてはならぬことである。(中村敬宇の文による)

【作者中村敬宇】名は正直、江戸の人。著名な漢學者で、かねて英語に通じ、大學教授、元老院議官となり、文學博士を授けらる。明治二十九年、年六十で歿した。

七〇 つとめて朝寝をなほす

佛蘭西にビユフォンといふ博物の大家があつた。若い中から非常に忍耐づよい、勉強家で、富有の家に生れながら、歡樂の事をしりぞけて、ひたすら學問にはげみ、徳性を養ふことを心がけてゐた。

たゞごくの朝寝坊である。で、光陰の輕んずべからざることと思ひ、

どうかして朝寝をやめようと心がけたが、さてなかなかやまない。やむなく下べにいひつけて、『わしを六時前に起してくれ、ば、そのたんびに御禮をする』と約束した。

下べはいひつけに従つて、毎朝一生懸命になつて起すが、さてなかなか起きない。けさは病氣だなんていつてにげる。そしてしまひには怒つて、どなりつける。そのくせ後では、『なせ起してくれなかつた』といつては責める。

そこである朝、下べが考へて、つめたい水をビンに入れて、主人の寢どこへつゝこんだので、彼ははじめてびつくりして起きた。それからたびたび、この手で起す中に、漸くくせがついて、起さなくても、ちやんと起きられるやうになつた。

ビュフオンは、それで晩年になつて、いつも、

『わしの著書の中、その四五冊はたしかに、私の下べの力によつたものである。』

というて感謝してゐた。

【ビュフオン】 コント、ド、ビュフオン。佛國の有名な自然科学者。學士會員に擧げられ、著書甚だ多い。千七百八十八年、年八十二で歿して。

七一 若い中に勉強せよ

ある田舎の家に二匹の犬がゐた。一つは親犬、一つはその子犬で、子犬の方はポチといふ名がついてゐた。

ポチはごくかはい、犬で、ちんちんもすれば、お預けもする、乳母車も引けば、水へも飛びこむ。そしていろいろのをかした見えをしては、

人、生れて
學、道を
ざらんと
知らざる
學ばざる
能はざる
能はざる
知らざる
同(具原)
同(具原)

人を笑はせるので、家の子どもはひどくかはいがつてゐた。

ポチがかうかはいく、そしてかう、藝がうまいので、子どもたちは、ある時、ふと親犬の方も藝を習はせたら、きつとおもしろからうと考へた。

で、隣の獵師の悴を教師にたのんできて、毎日のやうに、親犬に藝をしこんだ。しかしそれは全くむだであつた。どんなに骨を折つて教へても、少しもおぼえない。たまにおぼえたかと思ふと、すぐ忘れてしまふ。一月ばかりも根氣よくやつて見たが、到頭雇教師も匙を投げてしまつた。こなひだから、だまつて見てゐた。家の祖父さんは、この時はじめて口を開いた。そして子どもたちを集めて、いひ聞かせた。

「お前たちも、これで一つ學問ができた。御覽、年を取つては、何を習つても、覚えられるものではない。何でも若いうちに勉強して、

ほんとおぼえるやうにしなければなりません。さあそのつもりでお前たちも、今の中に、一所懸命に勉強しなさい。」なるほどと、子どもたちもつくづく悟つた。

七二三條の訓言

むかしエルサレムに、ヒレルといふ大學者があつた。貧困の中にあつて、刻苦勉強、遂にその大名を後世に傳へるまでの學者になつたが、その人の始終、自分も守り、人にもいひ聞かせてゐた、三條の訓言がある。

- 一、人もし自分の爲に盡すところがなければ、何人がよく、自分の爲につくしてくれようや。
- 二、人もし自分の爲ばかりに生活するといふのなら、自分はそも何

また嘗て祇園の神會を觀に行かうと思つてゐるところへ、ちようどある書生が、書物を持つてたづねてきて、質問しはじめた。羅山一々丁寧にこれを説明して、日の暮れるのを忘れ、到頭神會を觀なかつたといふ。明暦三年の正月十九日、近所から火事が起つた。弟子たちは、とてものがれますまい、もうちき火がうつりさうですと告げたが、羅山は書物を読んでゐて、たい僅にうなづくばかりである。その中もう火がうつつてしまつた。それで弟子があわて、せき立てるので、やつと駕籠に乗つたが、やはり書物を手にして、読んでゐたといふ。

やうやくにして郊外の別荘に逃げのびて、そこに落ちつくとも、まるで平生の通りで、よみかけの書物を、頻に読んでゐる。その中、邸の焼け落ちたといふしらせが来た。ちよつとふりかへつて、『書庫もか』と聞き、『すつかりやけました』といふ返事をきいて、

「あゝ惜しいことをした。長年骨を折つて集めた書物を、みんな焼いてしまつたか、あゝ惜しいことをした。」となげいたが、それでもすぐ又、書物の方に眼をうつして、そのまゝ讀みつゞけてゐたといふ。

【羅山】名は信勝、幕府の儒官であつた有名な學者。家康が最もこれを寵用して、幕府の文書、及び典例の如き、一にその手にまかせて大成せしめたといふ。明暦三年、年七十五で歿した。

七四 學者のいゝ手本

川田博士は、晩年に英語を學ばれたが、そのなくなられる、數日前まで、熱心に研究して、少しも怠られなかつたといふ。あゝこれ實に、學者のいゝ手本といはなければならぬ。

博士にどんな信仰があつて、死の近いのを知りながら、英語の研究をやめられなかつたのかは知らないが、たゞ常識からいへば、まことにをかした事である。しかしわれわれは、このをかした事の中に、一種の味があり、うるはしさがあり、調和があり、利慾以上の意味があるといふことを忘れてはならぬ。

人間は一面からいふと、永遠の爲に學ばなければならぬ。死ぬるまで理想に向つての努力を棄てゝはならぬ。まじめに自分を磨くためになした努力は、不朽不滅だといふ信念がなくてはならぬ。(綱島梁川の文による。)

【作者綱島梁川】早稻田大學出身の文學者で、基督教に歸依し、篤學の名の高かつた人である。明治四十一年に歿した。

【川田博士】名は剛、號は甕江、漢學者で、歴史家をかね、文學博士

を授けられ、宮中顧問官に任せられた。明治二十九年、年六十七で歿した。

七五 明日

いつも心の中に、明日のあることを知つてゐるものは幸福である。悲んでゐても喜びがあり、失望しても希望ができて、精勵の意、克己の念も、すべてそこに湧き出てくるのである。

ある寺に一人の老僧があつて、寺の庭で柿の接木をしてゐた。檀家のものが、ちようどそこに來あはせて、これを見て、

『あなたは、もうさう長生もなされますまい。それをかうして接木をしておいでになる。あまりお氣が長すぎはしませんか。』
といふと、老僧はにつこり笑ひながら、

「いやわしはとて、この木に柿のなるのを見ることは、できませんま
い。しかしわしのあとつぎのものは、きつとそれを見ることができ
るでせう。」

というたといふ。

事は小いけれど、推して大事に至るべきものである。偉大な思想と
いふものは、明日から延長して明後日に及び、更に十年、五十年、百年
五百年、千年の後に及ぶのである。そして偉大なしわざといふものは、
またこの思想を實行したものに外ならないのである。(徳富蘇峯の文によ
る)

【作者徳富蘇峯】前の二十二頁に出てゐる。

七六 士規七則

一、およそ生れて人となつたものは、人の禽獸に異なる所以を知らなければならぬ。蓋し人間には五倫の道がある。しかして君臣父子の道を、最も大きなものとなす。故に人の人たる所以は、忠孝を以て本となす

一、およそ御國に生れては、わが國體の世界に尊い所以を知らなければならぬ。蓋しわが皇室は萬世一系にあらせられ、よく民を養ひ、祖業をお襲ぎになつてゐる。臣民はまた君に忠にして、以て父祖の志を繼ぐことを心がけてゐる。君臣一體、忠孝一致といふのは、たゞひとりわが國において見るべき、美風である。

一、われわれの行は、質實にして欺かないのを以て要となし。巧詐過をかざるのを以て恥とする。光明正大は、みなこれより出づるのである

一、人古今に通せず、聖賢を師としなければ、すなはち鄙夫たるのみである。讀書し友を尙ぶのは、君子の事である。

一、徳を成し、材を達するは、師の恩、友の益が多きに在る、故に君子は交遊を慎む。

一、「死して後にやむ」といふのは、ことばは短い、義は極めて廣い。堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、これをおいて、外に術はないのである。(吉田松蔭の文による)

【吉田松蔭】名は矩方、通稱は虎次郎、舊萩藩の士、慷慨憂國の士でしきりに王事につとめた。安政中、米艦の來航した時。これによつて海外に渡らうとして、幕府の吏に捕へられ、獄につながれて、斬に處せられた。時に年二十九

七七 たとへばなし五つ

○

鹿の子の、母について、出て遊んでゐるのがあつた。馬に騎つて、弓を手にし、矢を負うてるものがくるのに逢つた。母はこれを見て、

「お前、あの肩の上にあるものを知つてゐるか、飛んできて、からだに當ると、きつて死んでしまふ。お前はいつもそれを避けなければならぬ。」

と教へた。

鹿の子は、それをきかないで、

「私は、その飛んできて、どんな風に當るかを見ようと思ふ。」

といつて、母のしきりに止めるのもきかないで、到頭矢に當つて死んでしまつた。

世間には、かたくなで、教に従ふことを知らない、かうした人がよくあるのである。

一見直に、
人と物との
良否を判す
べからず。
(英國俚諺)

○
一匹の小猿があつたが、人の鬘を剃るのを見て、そつと剃刀を盗んでそのまねして、自分で鼻を切つてしまつた。
世間の、習ふことをしないで、事に従ふものは、多くこのたぐひである。

○
ある貧乏人の子があつた。菌を採つて歸つてきて、母に向つて、しきりに自慢して、

「おつかさんの採つてくるのは、いつもきたない菌だが、私のはこんなに綺麗だ。」

といふ。

母はこれを見て、

「これは毒があつて、たべられません。お前よく氣をつけなければいけない。見かけの綺麗なもの、中に毒をもつてゐることは、ひとりこの菌ばかりではありませんよ。」
といひ聞かせた。

○
栗鼠が樹に上つて、胡桃を取り、その皮を噛み破つてゐたが、

「どうしてこんなに苦いだらう。」
と、顔をしかめた。

それでも、がまんして噛んでゐたが、やがて中の實のところになつて、はじめて笑顔をして、

「まづ苦いとこをたべなければ、どうしてこのあまいとこをたべることができよう。」

というた。

○ 一人の百姓があつた。子どもをつれて、畑へ出かけて、麥がみのつたかどうかをしらべてあるいた。

子どもが何心なく

「この麥の穂は、或は高く、或はうつむいてゐる。どつちが貴いのでせう。」

ときくと、父は二つながら、その穂を抜いて、子どもに見せた、

「中がすつかりみのもと、みんなかういふ風に頭を下げる。あのつんとして頭を下げることを知らないのは、みんなまだ未熟のものであるのだ」

といひ聞かせた。

七八 讀 書

一 いかにも多くの書物を所蔵してゐるかは、汝の名譽ではない。たゞいかにいゝ書物を所蔵してゐるかを以て、汝の誇となすべし。

あまねく萬卷の書を読みあさるよりも、數篇のよい書物を熟讀する方が、遙にまさつてゐる。(セネカ)

【セネカ】 ローマの哲學者、西暦紀元前四年に生れ、紀元六十五年に歿す。

二

われわれは食物を欲する念を以て、書物を思はなければならぬ。すなはち最も味のいゝものを得ようとするよりも、最も滋養の多いものを

室に書なき
は、體に如
神なきが
し、(シセ)

良書を得る
は、黄金を
得るよりも
遙に樂し。
(英國古歌)

求めるやうに心がけなければならぬ。人のすきすきで、そのいづれを擇んでもよいやうなものであるが、しかしわれわれの心がくべきものは、たしかにその後者にあるといはなければならぬ。(ブルターク)

【ブルターク】 ギリシャの倫理學者。西曆紀元五十年に生れる、二十一年に歿す。

七九 尊徳翁の勤勉

二宮尊徳翁は、相模國足柄郡櫻井村に生る。幼名を金次郎といふ。家はもと、ゆたかであつたが。父は世にいふお人よしであつたので、人にだまされて金を貸し與へなどして、だんだん家政が衰へるやうになり。金次郎の五歳の時には、全く貧乏になつてしまつた。あまつさへ、天災が頻にうちつゞき、洪水氾濫して、田畑はすべて荒れてしまふといふやうなひどい慘狀になつてしまつた。

艱苦は、善
人のため
は、燃然に
る機會なり
(ホーン)

うなひどい慘狀になつてしまつた。金次郎は幼心にも、學問の必要を知つて、どうにかして勉強しようと思つたが、筆墨や紙さへも買ふことができないので、砂の上に、箸で字を書いては、習つたといふことである。

十二歳の時、父が病氣で寝てゐたので、その代として、酒匂川の土手普請に出て、村の人々と共に、その勞役につとめたことがあつた。何しろまだ、十二の子どものことであるから一生懸命には働くものゝ、とて一人前の仕事はできない。そこで金次郎は、仕事を終つて家へ歸ると毎晩草鞋をこしらへては、翌日これを人々に捧げて、それで自分の力の足りないのを償つたといふ。その心がけのゆかしさ、見るもの、聞くもの、いづれみな感心しないものはなかつたといふ。

金次郎は日ごとに勞役して、家政を助けることにつとめたけれど、少

年の力では、どうにしても一家の生計を支へることができない。それに父が病気で寝てゐるので、その惨状は何ともいひやうがない。けれど金次郎は、ひるまず、屈せず、ますます努力して農事につとめ、夜はまた草鞋をつくり、他家にやとはれなどして、辛くも一家の生計を支へ、父の薬代を拂つていつた。

金次郎十四歳の時、父は到頭、死んでしまつた。つゞいて十六の時、母もまた死んでしまつた。そこで一家はなればなれになつて、兄弟別々に、親類へ分けて預けられることになつた。

金次郎の預けられた。伯父萬兵衛といふのは、ひどく頑固の人で、金次郎が書物を読むのがすきなを見て、ひどくこれを叱り、家業の邪魔になるというてちつとも許さない。で、やむなく家業のすんだあとで、夜更けて勉強しようとする、油がむだだというて、又さしとめる。金次

苦痛の後の
快樂は、甘
美たり。(ド
ライデン)

郎はし方なしに、廢地を開墾し、油菜を植ゑ、その種子を賣つて油にかへて、讀書したが、それでもまだ叱られる。

けれど金次郎は、どうしても勉強したくてならぬ。それで毎晩、一まづ寢所に入つて、眠つた風をして、人の寢しづまるのを待ち、夜半に起き出して、著物を行燈にかけては、そつと讀書に勵んだといふ。

その後、金次郎は、ある年洪水の爲に不用となつた苗を拾ひ集め、これを人の捨てた地に植ゑて、一俵あまりの米を得、これを資本にして、ますます勵みつとめ、遂に九畝あまりの田地を買ふことができた。そこで、二十の時に、久しくしめてあつた家に歸つて、これを再興した。さうしていくばくもなく、もとのやうなゆたかな家になることができた。その頃、金次郎は耕作につとめて、東の田畝から西の田畝にいく間にしばしば自分の門の前を通ることがあつても、その日のしごとを終らな

子の成功は
單に勤勉に
あり。子の
一生の間、

一片のパン
だにもし、決
して坐食せ
ざりき。(ウエブ
ス
ター)

いうちは、決して家に立ち寄らなかつたといふ。その努力のいかにはげ
しかつたといふことは、それでもわかるのである。

かうして、彼のあの晩年の偉業は、この努力の間に養はれたのである。

【二宮尊徳】性、寛仁、濟世を以て、みづから任じ、近郷その徳に浴
するものが多かつた。諸侯その名を聞いて、家臣をつかはして教を
乞ふもの多く、幕府も封を與へて、日光廟の祭田開拓の事を司ら
しめた。安政三年、年七十で歿した。

八〇 尊徳翁の道話の二三

すべて刃物をやり取りするには、きつと刃の方を自分に向け、柄の方
を人に向けて出すのを常とする。これは萬一過のあつた時、自分の身

に疵がつくとも、人には疵をつけまいとの意である。

かやうに、自分の身の上は損しても、人の身の上には損をかけまい、
自分の名譽は損しても、人の名譽には疵をつけまいといふのが、とりも
なほさず、道德の本意である。

嵐に倒れた松は、心がもう朽ちて、既に倒れようとしてゐる所の松で
ある。大風に破損した垣根は、杭が朽ち、繩がくさつて、もう破損しよ
うとしてゐる所の垣根である。

風は平等均一に吹くもので、松を倒し、垣根をこはさうとして、こと
更に吹くのではない。風がなくても倒れるのを、たまたま風で倒れたの
だ。世の中のことば、みんなこれである。

世の中で、貧富苦樂といひさわぐが、世の中はちようど、大海のやうなもので、たゞ水を泳ぐの、上手と下手とで別れるのだ。舟を浮べて用をたす水も、舟も覆して害をなす水も、水にかはりはない。たゞ時によつて、風に順風があり、逆風があり、海に荒い時があり、穏な時があるばかりである。だから溺死を免れるのは、泳の術一つにある。

世の中の海を、穩に渡る術は、勤と儉と讓との三つばかりである。(尊徳翁の道話より)

みちしるべ終

大正六年六月十五日印刷
大正六年六月二十日發行

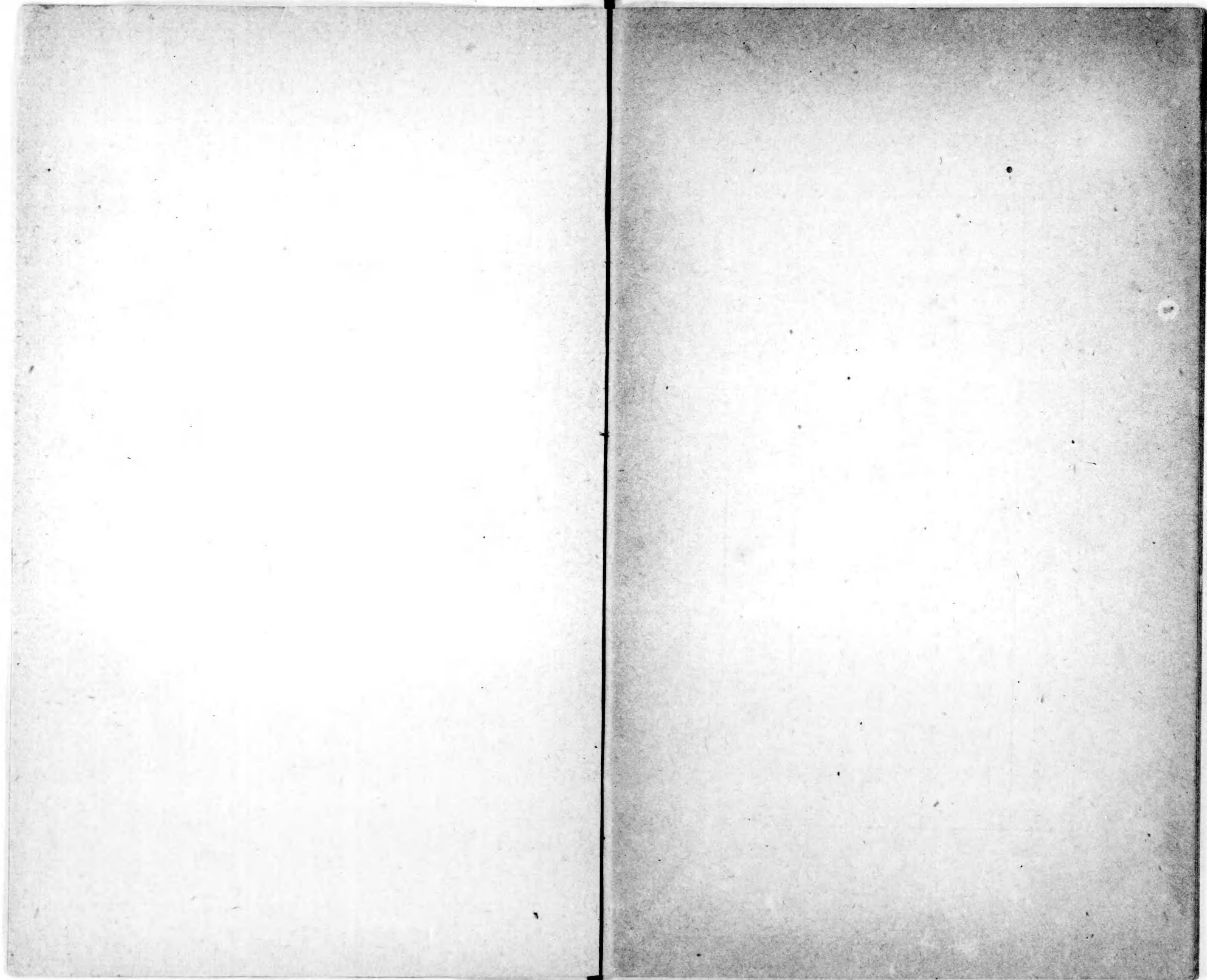
（みちしるべ奥附）
（定價金五拾錢）

編者	内海弘藏
發行者	椿卯之助 東京市下谷區北稻荷町四十一番地
印刷者	高橋利惣次 東京市小石川區指ヶ谷町十二番地
印刷所	高橋印刷所 東京市小石川區指ヶ谷町十二番地



發行所

興道之日本社



279
80

終

